

1 はじめに

経済発展著しい中国。中でも、経済特別区として特異な発展を遂げてきた深セン市に所在している深セン日本人学校は、2008年に世界で88番目の日本人学校として開校した。当初の児童生徒数は36名であったが、創立10年目を迎えた現在では300名にせまる中規模校へと変化しつつある。

『深圳速度』と呼ばれる目を見張るようなスピードで開発が進み、大きなエネルギーに満ち溢れている街。ここに暮らす日本人の子ども達が、変化の激しい時代にあっても逞しく生き抜く真の国際人になるようにという願いを込めた学校教育目標「国際社会において、心身ともにたくましく生きる児童・生徒の育成」のもと、その具現化を目指しながら教職員と保護者、理事会や日本商工会が一丸となって教育活動に取り組んできた。長いようで、過ぎてみればあっという間の3年間。辞令を受け取った時には想像もつかなかった深センでの生活。そのすべてがかけがえのない経験であったと、帰国から半年がたった今では胸を張ってそう思える。そんな3年間の一端をここにまとめる。

2 深センについて

(1) 深セン市の概要

中国南部の広東省にある深セン市は1400万人以上の定住人口を擁し、上海・北京に次ぐ中国第3の都市である。一人当たりのGDPは中国国内で最も高いと言われており、物価や地価の高騰が続いている。

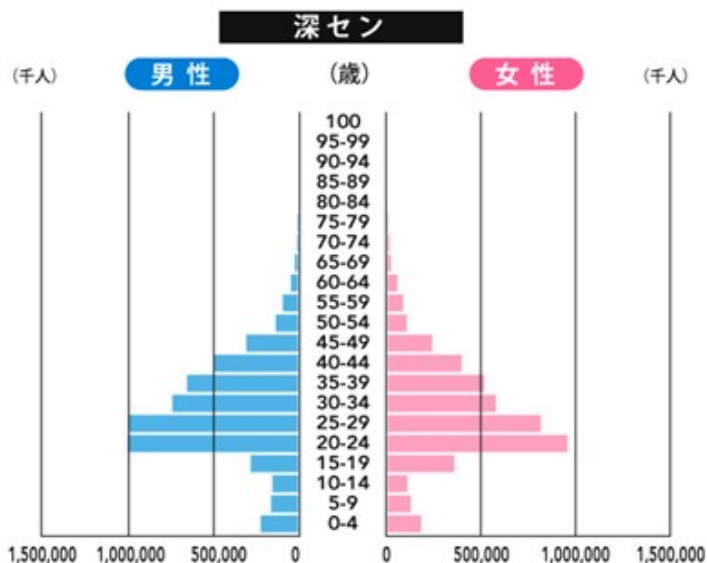
市の南部は香港と陸続きになっており、「口岸」と呼ばれる出入境ポイント（イミグレーション）を通して24時間行き来することが可能である。



沖縄よりもさらに南、台湾南部とほぼ同緯度に位置しているため、亜熱帯海洋性気候に属する。年間を通して湿度が非常に高く、本格的な夏を迎える前には「湿度100%」という日が続くことも珍しくない。夏になると、スコールが多く発生する。短時間で猛烈な雨が降るため、道路が冠

水することもしばしばである。

「移民都市」とも呼ばれる深セン市は、中国全土からの出稼ぎ労働者や世界各地からの移住者が多いという特徴もある。住民の平均年齢は推定28歳と非常に若く、20～30代の人口が全体の65%を占めている。地元出身者がほとんどいないため、広東省にありながら広東語ではなく普通話（北京語）が話されるという稀有な地域である。



(2) 深セン市の街づくり

深センの都市としての歴史は浅い。かつては人口3万人の小さな漁村にすぎなかったこの街が、中国で最初の「経済特区」に指定されたのは1980年のことである。時の最高指導者・鄧小平による経済開放政策によって、わずか30余年で中国を代表する大都市に発展した深セン市。1000年以上の歴史を持つ他の都市のような歴史ある街並みは存在しなかったため、山を切り崩し、海を埋め立てながら、古い区画にとらわれない広々とした街づくりが行われていった。



↑ 1980年代の深セン市中心部



↑ 現在の深セン市中心部

深

セン市の中心部を東西南北に貫く幹線道路はどれも幅が広く、片側5車線は当たり前である。加えて、横道に入っていく車やバスが走るレーンがその両端に1・2車線あり、幹線道路と細い道路の間は所々で出入りができるようになっている。幹線道路同士の交差点は立体交差となっているため、信号はほとんどない。まるで高速道路のようである。

深圳の道路は車社会の到来を見越して造られたものであり、車で移動するには非常に便利になっている。その一方、幹線道路を渡るには数百メートルごとにある地下道を抜けな



ければならず、自転車や徒歩で移動するには不便な面もある。

公共交通手段は、日本以上に発達しているといっても過言ではない。多くの市民が利用する MTR（地下鉄）やバスは、「深圳通」という IC カード、「互通行」という香港オクトパスカードとの一体型 IC カード、スマートフォン等で支払いを行えば、2割引で乗車することができる。

MTR（地下鉄）は、現在 8 路線が運航されている。深センに初めての路線が開通したのはわずか 13 年前の 2004 年のことであり、2014 年の赴任当時はまだ 5 路線だった。今日でも驚くべきスピードで延伸工事が進められており、3 年以内に新たに 3 路線の運航が予定されている。



↑ 深セン・香港で使用可能な IC カード（互通行）



バスは、深センで生活した 3 年間で大きく様変わりしたものの一つである。2014 年当時は 100% ガソリン車で、中にはディーゼル車のようなものも見られたが、2017 年の帰国間際にはほぼ 100% 電気自動車になっていた。2 階建てバスやノンステップバスも徐々に増え、とても快適にバスに乗れるようになった。



↑ 電気バスの充電スタンド

↑ 2 階建てバス

2016年からは、レンタル自転車も急激に広まった。当初は環境政策の一環として導入されたものであるが、現在は大きな社会問題となっている。数百メートルおきに設置された貸出ポートで手続きを行えばどこでも乗り捨てても良いというシステムだったが、回収作業が全く追いつかず、どこの歩道も放置自転車で溢れ返るような状況が続いている。



(3) 深セン市のIoT化

政府主導で新興事業発展のためのインフラが整えられていることから、スタートアップ企業や大手メーカーの製造工場が数多く存在する深セン。今日では「中国のシリコンバレー」と呼ばれ、アメリカのapple社をはじめとする数多くのIT企業が製品開発の拠点としている。



↑ 電子マネー対応自販機

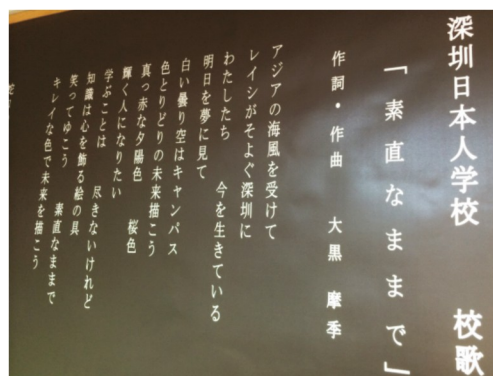
そんな深センでは、財布を持ち歩かないということも決して珍しいことではない。市内のほぼ全ての店では、支付宝（アリペイ）や微信支付（WeChat Pay）のような電子マネー決済が可能であり、スマートフォンさえ持っていれば何ら困ることはない。道端で果物を売る露店のおじさんですら電子マネー決済を受け付けており、その分野においては日本よりもはるかに進んでいる印象を受ける。

地下鉄やバスの乗車、自動販売機での飲料の購入、図書館での本の貸し借り、ICカードへのチャージ、ストリートミュージシャンへのチップにおけるまで、ありとあらゆる場面でスマートフォンでの電子マネー決済が可能であり、今後も益々広まっていくだろう。

3 深セン日本人学校について

(1) 深セン日本人学校の概要

- ① 深圳日本人学校
- ② 開 校：2008年4月14日
- ③ 開 校 地：深圳市南山区蛇口工業一路8号
海濤大厦后面1.2階
- ④ 運営主体：深圳日本人学校理事会
- ⑤ 学校形態：小中一貫全日制日本人学校



都市開発がより一層進んだ2000年代初頭には、日系企業の深セン進出も急速に進んだ。香港との海の玄関口であり、すでに多くの欧米人が居住していた南山区・蛇口には複数のインターナショナルスクールが設立され、付属の幼稚園に未就学児を通わせる日本人家族は増えつつあったという。しかし、日本人学校が無いという理由から、隣町の香港や広州

市に住み、深センの会社に通うという生活をしていた方が多くいたと聞く。

日系企業のさらなる進出に伴い、急務の課題となったのが日本人学校の設立である。2006年4月に行われた深圳日本商工会総会では、設立準備委員会の設置が承認され、設立に向けての動きがいよいよ本格化した。翌年2007年の5月には文部科学省に正式に申請が出され、深圳市教育局・広東省教育庁への申請へとつながった。

こうして2008年4月に開校した深圳日本人学校。開校時の児童生徒数はわずかに36名、教員は11名での船出であった。ホテルの2フロアを借りて改築した校舎にあるのは、普通教室のみ。グラウンドや体育館、特別教室は無かったため、休み時間の遊び場は向かいの公園。体育の授業や中学部の部活動を行う際には、近くの公共体育館までバスで移動していたそうだ。運動会や学習発表会は、今でも交流学习を行っている育才三小の施設を借りて行ったということで、様々な面から諸先輩方の苦勞を垣間見ることができる。



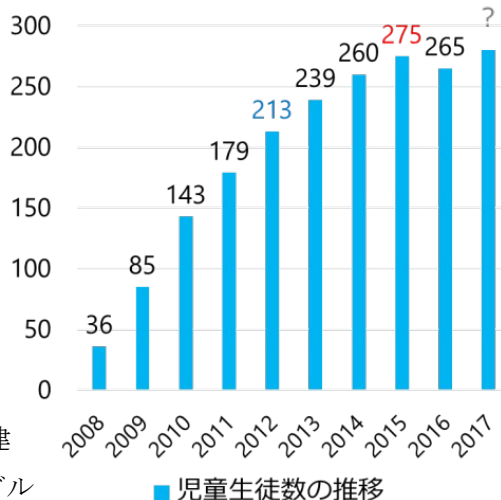
↑ 2008年開校当時の深圳日本人学校

(2) 児童生徒数の推移と新校舎への移転

2008年は36名だった児童生徒数が、2009年には85名に倍増し、2010年には143名になった。開校からの3年間で校舎の収容人数を大きく上回ることとなり、新校舎への移転に向けた動きが本格化する。しかし、そこで大きな課題となったのが土地の確保であった。

深圳湾大橋が開通し、香港と陸路での行き来が可能となった南山区は、オフィスビルやタワーマンションの建設ラッシュに沸いていた。日本人居住区として定着しつつあった蛇口地区には、学校を建てようにも広い土地が残されておらず、オフィスビルを全面改築するという方法で新校舎の移転に踏み切った。

児童生徒数の推移 (毎年4月)





↑2012年に移転した新校舎

2012年3月には校舎の移転が完了し、新年度のスタートに合わせて同年4月からは新校舎での学習が始まった。しかし、時同じくして尖閣諸島をめぐる問題が巻き起こる。日中関係は大きく揺れ、学校生活にも様々な影響を及ぼすこととなった。投石によって窓ガラスが割られる、校舎の壁に落書きをされる等の被害が発生し、止む無く臨時休校になったこともあるそうだ。秋に予定されていた小学部の修学旅行は、安全面を考慮

して行き先を変更。運動会は地元小学校のグラウンドを貸してもらえなくなったという理由から、本校敷地内でやれる範囲の種目を2日間に分けて行ったという。

(3) 校舎内の設備

先に述べた通り、深セン日本人学校の校舎は8階建てのオフィスビルを改築したものであり、教室の形や大きさはそれぞれ違う。そのため、年度当初の学年・学級の数に応じて普通教室が割り当てられ、机・椅子の入れ替え作業は年度初めの恒例行事となっていた。



理科室、音楽室、図工室、家庭科室、図書室、コンピューター室といった基本的な特別教室は備わっていたが、やはり日本とは異なる環境での教育活動だ。家庭科室なのに火気厳禁、コンピューター室なのに時間帯によってはインターネットが繋がらない、狭すぎて身動きの取れない音楽室や図工室での授業等、日本では考えられないような状況にも数多く遭遇したが、“あるもので最大限の教育活動を”と考えることで、驚くことも徐々に減っていった。



↑家庭科室



↑コンピューター室



↑音楽室

全国から集まった仲間達と知恵を出し合い、よりよい方法を考えることによって、多くの困難を乗り越えてきた。しかし、体育の授業に関する様々な課題は、日に日に大きなものとなっていった。



派遣2年目の2015年、私は小学部第1学年の担任をすることになった。この年の入学児童は約60名で、深セン日本人学校史上最多。人数だけを聞くと何ら

問題ないように思われるかもしれないが、深セン日本人学校には広々とした運動スペースが無い。また、特別教室の使用割当てを小1から中3までの9学年で調整しているため、各学年につき週に2~3コマしか体育枠は与えられない。結果として学年体育をせざるを得ないわけだが、やはりスペースの問題が大きいのしかかることとなった。

まずは、体育館がない。深セン日本人学校にあるのは、ホールと呼ばれる少し大きめのスペースのみ。その上、大きな柱が数本むき出しになっているので、死角となって指導の邪魔をする。直線で長い距離を取ることができないため、とび箱やマット運動の際には毎回頭を抱えていたことが今となっては懐かしい。

さらに、グラウンドもない。深セン日本人学校にあるのは、屋根付きのバスケットコートとフットサルコートほどの人工芝のみ。直線距離にすると20m程、校舎の横から校門前まで斜めに突っ切ってようやく50m走のコースがとれる程のスペースの中で体育の授業を行うのだから、

北海道の学校からすると想像もつかない世界である。

試行錯誤を重ねた結果、複式校で行われている「ずらし」や「わたり」のような指導が、思いのほか役立つということを知った。1組がなわとびをしている間に2組は鉄棒をする、1・2班が試合をしている間に3・4班はシュートの練習をする等のように、様々なパターンと教員の配置を考えながらより効率的な1単位時間の学習を心掛けた。実際に複式校で勤務したことはないが、思わぬところで学生時代の知識が活きることになるうとは思ってもみなかった。



↑ホールでの体育の授業



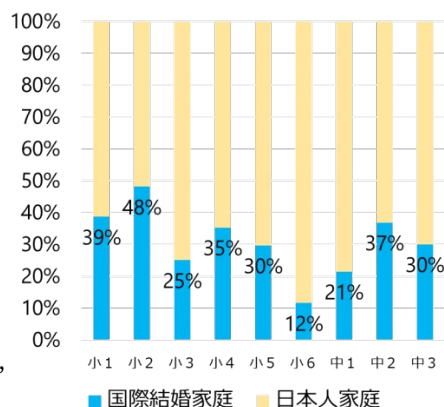
↑外での体育の授業

(4) 深セン日本人学校の新たな課題

日本の学校現場と比べるとまだまだ不十分に感じられる部分もあるが、開校10周年を迎えた現在では当初とは比べ物にならないほど設備も人員も充実してきている。

派遣期間の3年間で、その変化が特に著しかったものがある。国際結婚家庭の割合の増加、つまり両親のどちらか一方のみが日本人であるという児童生徒の増加である。2015年度入学の小学2年生（現小3）においては、約半数が国際結婚家庭。両親ともに帰化している場合もあるため、正確に言えば割合はもっと上がるだろう。中学部になると割合が再び上がるのは、小学部卒業を節目に帰国する家庭が多いためである。2016年度に担任していた小学6年生のうち、実に40%が卒業と同時に帰国している。

国際結婚家庭の割合 (2017.3)



深セン生まれ、深セン育ちの児童生徒が増えてきていることから、豊かな日本語で自らの考えを自在に表現する児童生徒の育成は、今後益々重要な課題となっていく。グローバルな視点で物事をとらえ、国際社会で通用するスキルを磨いていくためにも、自らの考

えを生き生きと表現できる自己表現力と言語力を身に付けていくことは必要不可欠だろう。

4 おわりに

深セン市内では、至る所で「来了，就是深圳人」というスローガンを見かける。これは「来たらあなたも深圳人」というような意味であり、深センに来れば誰でも深センの人になれ、深センに来れば誰にでも発展するチャンスが与えられるというのである。中国全土には何百年、何千年もの歴史ある都市が数多く存在するが、それらに比べると深センは生まれたばかりの街である。深セン日本人学校も同様に、歴史の浅い学校である。しかし、学校の設立を願う行動を起こした当時の保護者や日系企業、その実現に向けて舵を取った日本商工会や領事館、外務省や文部科学省の人達の思いは、何にも替え難い宝である。そして、その思いを受け継ぎ、よりよい学校づくりに向けて一丸となって教育活動に取り組んできた多くの教職員もまたかけがえのない宝であり、その存在無くして今日の深セン日本人学校はない。

3年間の深セン生活では、高層ビルの建築、地下鉄の延伸、道路の拡張、新しいフェリーターミナルの開港といったハード面の変化はもちろん、列に並ぶ、席を守る、信号を守る、シートベルトを締めるといったソフト面の変化も大きく感じられた。昨日見た光景と今日見ている光景は全くの別物で、半年前にはなかった建物が気付けば完成していたということも珍しくはない。成熟社会に突入した日本では、このような変化を目の当たりにすることはまずないだろう。工事の音がうるさくて、授業にならなかったこともある。学校前で行われていた道路工事の爆破の衝撃によって、校舎内の壁や天井が落ちたこともある。工事車両の光がまぶしくて、眠れなかったこともある。3年の任期を終えて帰国した今では、そのすべてが忘れられない思い出となり、笑い話に変わっている。きっとそれは、深セン日本人学校を通して出会えた、たくさんの方々のおかげだろう。



私たち教師は多くの使命を帯びている。その中でも最も重要な使命の一つが、授業を通して一人ひとりの児童生徒に確かな学力をつけさせていくことである。その学力の根幹にあるものは、話す力、聞く力、読む力、書く力等の言葉の力であり、あらゆる教科・領域の学びを支える力である。自分の考えを話したくてたまらない。友だちの考えが聞きたくてたまらない。目の前にいるすべての子どもたちに豊かな日本語を身に付けさせ、自らの考えを自在に表現できる学級や学年を、そして学校をつくっていききたい。そう願いながら、全国から集まった仲間達とともに夢中で駆け抜けた3年間。創世記の深セン日本人学校で勤務するチャンスをいただけたことを誇り思い、在外教育施設派遣の経験とその意味をしっかりと語り継いでいきたいと思う。そして、目の前にいる北海道の子ども達のために、少しでも価値ある教育を行ってあげたいと考えている。